

胃ポリープとは胃に発生する上皮性隆起性病変を指し、古くからその意義について議論されてきた。非腫瘍性胃ポリープには、腺窩上皮型過形成性ポリープ、胃底腺ポリープといった日常臨床でよく遭遇するポリープの他に、若年性ポリープ、過誤腫性ポリープ、胃底腺ポリーポーシスなど、比較的まれな病変も存在する。それらの成因、鑑別診断、malignant potential、*Helicobacter pylori* (*H. pylori*) 感染やプロトンポンプ阻害薬 (proton pump inhibitor ; PPI) との関係については既に判明しているものもあるが、不明な点も少なくない。

序説は春間先生が担当し、非腫瘍性胃ポリープの歴史的背景、診断、発生病態についてわかりやすく簡潔に解説されており、胃ポリープの概念を理解するうえで極めて役立つ内容である。

八尾論文は、腺窩上皮型過形成性ポリープ、胃底腺ポリープ、hamartomatous inverted polyp、内視鏡的切除後の再生ポリープ、吻合部ポリープ (stomal polypoid hypertrophic gastritis) について、病理学的立場からその特徴について詳細に記載されている。

赤松論文は、通常光を用いた胃隆起性病変の鑑別診断について、内視鏡所見をもとにしたアルゴリズムに従って読影すると理論的に鑑別を進めることができると述べている。特に初学者にとって役立つ内容と思われる。

山階論文は、NBI 拡大観察によって、胃ポリープと背景粘膜の表面構造を foveola type と groove type の 2 つに分類して検討すると、胃底腺ポリープと腺窩上皮型過形成性ポリープを正確に鑑別することが可能であると述べている。

大草論文は、腺窩上皮型過形成性ポリープの内視鏡所見や背景粘膜の特徴、自然史、癌化の頻度、*H. pylori* 感染やガストリンとの関係などについて臨床的立場から記述している。

鎌田論文は、胃底腺ポリープの組織所見や背景粘膜の特徴を述べるとともに、*H. pylori* 感染 (陰性例に多い) や PPI との関係について記載している。また、通常の胃底腺ポリープとは異なり、家族性大腸腺腫症に伴う胃底腺ポリーポーシスは腫瘍

化する可能性があるため定期的な経過観察が必要であると述べている。

稲葉論文は、EMR や ESD によって生じた人工潰瘍の治癒過程で潰瘍部に生じる隆起性病変 (瘢痕部ポリープ) について、頻度、発生部位や組織所見の特徴、臨床経過、成因について述べ、U 領域や M 領域に比べて L 領域に多いこと、抗潰瘍薬の中止によって平坦化する症例が多いこと、高ガストリン血症が原因となっている可能性があることを記述している。

小澤論文は、食道・胃接合部に発生したポリープを“腺窩上皮型”と“扁平上皮型”に分類できると述べている。腺窩上皮型は、発赤した山田分類の I または II 型の形状を示し、ヨード不染を呈する。一方、扁平上皮型は褪色ないし白色と赤色のまだらな色調を呈し、形状は III 型で、ヨードに対して不染部と濃染部が混在することが多いと記述している。前者の診断は容易であるが、後者は生検組織所見で悪性腫瘍との鑑別が問題となる場合があり、確定診断の目的でトータル・バイオプシーが必要になることがあると述べている。

梅野論文は、様々な消化管ポリーポーシスに胃病変を伴う頻度と胃癌発生率を検討し、特に新しい疾患概念である家族性胃底腺ポリーポーシスは胃癌の高危険群であると述べている。

青井論文は、PPI の長期服用中にポリープの増大を認め、表層に異型上皮を伴った胃底腺ポリープの 1 症例を報告し、PPI の長期連用が胃底腺ポリープの増大や異型上皮の発生に関与した可能性について論じている。

高柳論文は、*H. pylori* 感染を伴わない胃底腺領域に発生した 0-I 型早期胃癌 (胃型胃癌) の 1 例を報告し、*H. pylori* 陰性例であっても分化型胃癌が発生する可能性を示唆している。

今回の特集号では非腫瘍性胃ポリープに改めて焦点を当て、エキスパートの先生方に最新の知見をもとにその特徴や意義についてご執筆いただいた。胃ポリープに関する読者の理解が深まれば、この特集を企画した一人として望外の喜びである。